
カサブランカの記憶

藍沢 要

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カサブランカの記憶

【Nコード】

N2567P

【作者名】

藍沢 要

【あらすじ】

医者を目指していた友人。その友人に恋をした彼女。デザイナーになるために必死だったあの頃の自分。俺達は一人前になるために、一体何を見ていたんだろう。

編み物BABYのスピノフ作品になります。唯の両親と総一郎のお話です。

ゆっくりめの更新になります。

プロローグ：香り

カサブランカの香りが漂っている。むせ返るほどの濃厚な香り。

この香りは、あいつを思い出す。

あいつが好きだったカサブランカ。

なあ、お前は今どうしてる。

千歳には逢えたか。

今は千歳と一緒にいるのか。

二人でお前達の子供を見守っているんだろうな。

祥子。

俺の最愛の祥子。

俺はお前と逢えて、幸せだった。

お前はとうだった？

俺は、千歳に怒られるだろうな。あいつは俺に対して容赦がないから。

祥子。

今年のお前の誕生日はカサブランカを持って行くよ。
待っていてくれ。

1：親友

「千歳！！」

呼びかける声に気付いた男が振り返る。

呼んでいた相手が俺だとわかると、何やら眉間に皺を寄せやがった。なんだ、失礼なやつだな。せつかくわざわざ来てやったのに。

「なんでお前がいるんだ。総一郎。」

「はっ！冷たいなあ千歳君は。せつかくお前の門出を祝ってやろうと思ってきたのによお。」

「お前に行く日にち言ってなかっただろ。誰から聞いた。」

「あ？内緒。」

軽く頭を抱えたこいつは、神崎千歳。俺の幼なじみであると共に、親友でもある。

千歳は昔から頭が良かった。中高と生徒会長を務め、そのままストレートに医大へトップの成績で入学した。

だが、コイツはいきなり大学を辞めて、アメリカへ行くと言い出した。救命医療の本場アメリカで学びたいと言い、周囲の反対を押し切りメディカルスクールへの入学を果たし、今日渡米する。

誰にも言わないで単身アメリカへ行こうとする辺り、如何にもコイ

ツらしい。昔一緒に遊んでいる時も、いきなり居なくなるなんてことザラだった。大概、家に帰ってのほほんとしながら、探し回った俺を見てきょんとしていた千歳と喧嘩したのはいい思い出だ。

「総一郎、お前も行くんだろ？イタリア。」

「…知ってたのか。」

「当然。俺を誰だと思ってる。で？いつ行くんだ？」

「来月。ミラノのアトリエで働くことになってる。」

「ミラノか。お前もちゃんと夢実現出来そうじゃないか。お互い頑張ろうな。」

「夢ねえ。まあ、昔からやりたかった事だからな。絶対にやり切るさ。だから千歳、ちゃんと連絡よこせ。嫌でもアメリカから電話しろよ？」

「アメリカとイタリアって時差何時間だっけ？」

「お前の方が頭良いんだから、それ位わかんदार。とにかくちゃんと連絡よこせよー!!」

わかったよと苦笑しながら話す千歳と一緒に出国ゲートの前まで来た。

ここからは俺達の夢への実現が出来るかどうかの分かれ道だ。二人

とも楽観的に考えてはいない。これから先何があるのがわからないのだから。

だが、俺達は成し遂げてやる。お互いに目線で無言の会話を果たす。

「じゃあな。元気でな。立派に目標の外傷外科医になれよ。」

「ああ、お前も有名なデザイナーになれるさ。ああ、そうだ！もし俺が結婚する時、お前がウェディングドレス作ってくれ。」

「ウェディングドレス？お前、当てがあつたのか？」

「ははっ！内緒だ内緒。だから、俺が結婚式あげる日までには有名になつてろよ。Dr・カンザキのウェディングドレスはソウイチロウ・キリュウの作ったドレスなんですってー！！って言われたいじゃん。」

「ふーん？まあいいや。わかった。作ってやる。代わりに、俺が怪我したらお前が治療するんだろ？当然。」

「お前はうるさい患者になりそうだな。」

くつくつと笑いながら、千歳は背を伸ばす。自然、俺も姿勢を正す。真面目な顔の中にも微笑みを交えて、別れの挨拶を交わす。

「じゃあな。」

「ああ。」

やけにデカく感じる千歳の背中を見送った俺は、一ヶ月後、イタリ
アへ発った。

2：夢と現実（前書き）

文中に『』の会話が出てきます。一応イタリア語になりますので、あしからず。

2：夢と現実

日本を発って、早くも一年が経っていた。

俺が働いているのは『Du pont』（デュポン）という、一般にはあまり知られていないブランドのレディースラインだ。今はまだまだ雑用しかやらせてもらえていないが、近い将来このブランドを世界的に有名にしてやろうと意気込んでいた。

俺が初めて『Du pont』の服に出会ったのは、13歳の頃。当時イタリアに住んでいた俺は、ただ漠然と親が決めたルールを歩く事の意味を見い出せないでいた。

父は外交官で、母は良き妻の見本のような人だった。それはいい親だという意味ではない。

両親は、俺にも将来外交官か官僚になって欲しいと考えていて、幼い頃から徹底的な英才教育を施された。

それから数年経ち、弟が生まれ、弟の方が優秀だと分かると手のひらを返したように、両親は弟を熱心に教育した。

何をしても弟の方が上手くこなし、弟ばかりが可愛がられる。当然俺は家族から弾かれたように、孤立した存在だった。

そんな中、俺は『Du pont』のイブニングドレスを見て、一目で心を奪われた。

大胆にカットされた襟ぐり、流れるようなウエストライン。背中に

は布が一切無い。裾は波打つように長く。それでいて膝から下がわざと見えるような計算のされ具合。

ヴァイオレットカラーの美しいドレスは、俺の心を激しく揺さぶった。

セクシーかつ、エレガント。

その言葉がまさに相応しいドレスだった。

当時『Dupont』のデザイナーは『エリザベート・デュポン』。『Dupont』ブランド創設者の孫であり、トップデザイナーでもある彼女のデザインした服はまさに魔法のような素晴らしさだった。

エリザベートのイブニングドレスに出逢い、影響を受けた俺は密かにデザインの勉強を始めた。

初めは興味本位な見様見真似の落書きのようなデザインだったが、俺が本格的にデザイナーを志すまでにはさほど時間はかからなかった。

両親と決定的に袂を分かったのは、デザイナーになるために大学を中退め、単身イタリアに行くとした時だ。

これまでも親子仲は良好とは言えなかったが、この事が決定打になった。

「お前は私たちが育てたとは思えない失敗作だ。もう二度と桐生の敷居を跨ぐな。」

こうして俺は、桐生の家族とは縁を切った。

どうせ優秀な弟がいるのだし、俺にはこの両親と弟の選民意識が好きにはなれなかった。俺はこの縁が切れることに清々していた。

ただ一人、千歳はそんな俺を見て苦言を呈した。

「お前さー、家族と縁切ったって言っても、一応は血の繋がった親と弟じゃないか。寂しくないわけ？」

「寂しい？千歳、お前本気で言ってるのか？親父はいつも俺を『出来損ない』扱いだったし、お袋は弟にべつたり。弟は弟でマザコン一直線だよ。あんなのと家族だなんて虫唾^{むしず}が走る。」

「総一郎。」

「なんだよ。」

じつとこちらを見る目は厳しい。何かを言いたいらしいが、千歳はむつつりと口を噤んだ。

「なんだよ、ハッキリしねえな。言いたい事あるんだったら言えよ。」

「

「いや……いい。お前もいつかわかると思う。」

それきり千歳は何も言わなかった。

『ソウ！これ運んで！それからこっちの布も持ってきて！』

『わかりました！』

あれから忙しい毎日を送っている。

だが、あの閉塞しきった幼少時代を考えれば、今の方が遥かに充実している。

夢は、エリザベートのような誰かに影響を与えられるほどの服を作ること。そのために、今は日々勉強だ。例え雑用でも、それが俺の糧になると信じているから。

千歳も今大学で医者になるために勉強に励んでいるだろう。

俺と千歳。

どちらが先に夢を叶えるだろうか。しかし、いくら競争したって、叶えばどちらも勝者だ。

夢を実現させるために俺達は、一日一日を大切に過ごす。

そうだと、千歳。

3：結婚と離婚（前書き）

この話はあくまでもフィクションです。

3：結婚と離婚

俺がイタリアに行った時、その時付き合っていた女と別れた。

イタリアと日本の遠距離なんて俺には無理な話だったし、何より服だけの事を考えていたかった。彼女には泣かれたが、俺にはどうしようもなかった。というか、する気が無かった。情性で付きあっていたようなものだったから。

イタリアに来て、仕事を覚えるので多忙だったのもあるが、面倒くさいのもあり、特定の誰かと付き合うとかそういうのはしてなかった。

後腐れのない女と寝るだけ。

その関係は酷く楽だった。

そんな付き合いばかりをしていた時、俺は沙羅と出逢った。

彼女の名前は、都筑・沙羅・デュヴォワ。

当時、駆け出しのファッションモデルだった彼女は、日本人の祖父とフランス人の祖母を持つクォーターで、とても美しい容姿をしていた。

祖母譲りの彫りの深い目鼻立ち、東洋人の肌特有のシミ一つない均整のとれた細い身体。何処を歩いても、沙羅は人目を引く存在だった。

だが、ファッションウィークになれば世界のトップブランドがミラノに集まる。

という事は、ファッションモデルも沢山いる。それこそ、モデル志望の若い女なんて掃いて捨てるほどいる中で、ランウェイを歩けるモデルは、オーディションやそのモデルの知名度で選ばれる。

そんな中では、沙羅程度のモデルなんてザラにいた。何回もトップブランドのオーディションを受けては、落ち、ようやく受かったのが『Dupont』。

「やっと受かったと思ったら、こんなマイナーなブランドなんて！」

久しぶりに日本語を聞いたと思ったら、そんな暴言だった。思わず、声の主を探して、それが沙羅だった。

はつきり言って、俺の一目惚れだったと思う。それだけに、沙羅のワガママな行動や、言動には目を瞑った。

仕事が忙しく、なかなか会えなかったりするとアパートメントに連絡も寄越さずに夜中に来てみたり、クラブで遊んだ後に泥酔状態で帰ってきたり。

その度に喧嘩をした。だが、最後には沙羅に「私を愛して無いの！？」と言われ、泣かれて終わる。

なんだか、だんだん疲れて来ていたのも事実だった。そんな関係が2年続いた、ある日、沙羅が真剣な顔で俺に話があるから、今から会えないかと言われて、俺のアパートメントの近くのカフェで会うことになった。

「妊娠したの。」

一瞬、頭が真っ白になった。

その後に、喜びが心を占めた。俺はすぐさま、その場で跪いて沙羅にプロポーズをした。指輪が無かったので、俺がはめていた指輪を婚約指輪代わりにして。跪いている俺に沙羅は泣きながらイエスの返事をしてくれた。

嬉しかった。

俺の家族が出来る。

血の繋がった俺の子供と、愛している沙羅の。

嬉しくて、時間も、時差の事とか何もかも忘れてすぐさま千歳に電話した。

「もしもし、千歳？俺結婚するから。」

『は？お前結婚って何？まさか、あの沙羅っていう女？本気かよ…』

「何だよ、その反応。てつきり喜んでくれるんだと思ってたのによー。あ、あと、俺父親になるから。」

『はあ！？』

「何だよ、聞こえなかったのか？子供が来年生まれるんだ。」

『聞こえてるよ、聞こえてるけど…。子供って総一郎、お前…。』

それだけ言っと、千歳は黙った。

そう言えば、こいつもそろそろインターンになるんじゃないかか
と思います。

「そついや、お前そろそろインターンになるんじゃないかか？」

『…あ、ああ。』

「大丈夫なのか、お前。大学、2年もスキップしてるんだろっ？」

『ああ。勤務する病院も決まったしな。なんとかなってると思う。』

「そうか。立派なアテンディングになって、後輩にもいろいろ教えてやれよ、大先生。」

『うるさい。…なあ、総一郎…、本当にこのまま沙羅と結婚するの
か？』

やけに突っかかるなと思った。

千歳のこの言い方はきつと賛成してはいないのだろう。長年付き合ってきた俺にはわかる。

「お前、反対なんだろ。俺の結婚。」

『…反対とかじゃないんだけど…。お前さ、沙羅を愛してるから結婚するんだよな？子供が出来たからじゃなく、沙羅と一緒に居たいからだよな？』

「当たり前だろ。」

そう言いながら、俺は千歳が投げかけ、心の中に波紋を広げている瘡しじりを無視していた。

一年後、沙羅は無事に元気な男の子を生んだ。

秀でた子になって欲しくて、そのまま『秀人』と名付けた。

そして、その四年後、娘の美奈も生まれた。

仕事も板に付いてきて、若輩ながら俺にも自分の仕事がさせてもらえるようになっていた。

公私とも順調で、幸せだった。

可愛い子供達と、愛する妻、沙羅。

思えば、その時期が沙羅と過ごした幸せの絶頂期だったのかもしれない。
後になってそう気付いた。

美奈が生まれた後、俺は仕事で大きなチャンスを手に入れた。

イタリアの有名富豪の未亡人が着るドレスを、俺がデザインする事になったのだ。

これが成功すれば、『Dupont』最年少のトップ就任も夢じゃないと周囲からの期待も高く、俺はひたすら試行錯誤を繰り返して、ようやく納得がいくドレスを作り上げた。

赤を基調としたタイトなドレス。

オフショルダーの、纏わりつくほど長い裾が特徴のそのドレスは、イタリア社交界の話題となった。

その噂を聞きつけたイタリアの王族の一人が、是非とも妻のイブニングドレスを作って欲しいと依頼され、俺はその仕事にも嬉々として飛びついた。

そして、気が付けばいつの間にかあれほど憧れだった『Dupont』のトップデザイナーに就任していた。

エリザベートのイブニングドレスに心を奪われ、家族を捨て、日本を離れて、イタリアの地に来て、既に10年以上経っていた。

俺は遂にここまで来たのだ。

千歳からもトップ就任の祝いは電話でもらった。

『おめでとう、総一郎！やったな、お前！！』

「ああ、ありがとう、千歳。ようやくここまで来たよ。俺、単純に
すげえ嬉しい。だってさ、夢だったんだぜ？それが遂に実現出来た
なんて信じられねえ。」

『ははっ！まさか泣いてないよな、総一郎？』

「泣かねーよ！！ま、感涙ってやつは泣いた内に入んねーけどな。」

はははと笑いながら、互いの近況を話し合った。

千歳は、1年のインターンが無事終え、レジデンシーも終了しよう
としていると言った。

「へえ…じゃあ、そのまま外傷のアテンディングになるのか？」

『いや、フェローシップも考えてるんだ。だけど、フェローを受け
ると、更に研修期間が伸びるし、また忙しいままだからな。悩んで

るんだよ。』

「そうか…。お前はどうしたいんだ？」

『もちろんフェローは受けたい。知識が増えるからな。ただ、俺…』

「どうした？ただ、なんだ？」

『好きな子が出来た。』

しばし呆然。

その後、千歳には悪いが爆笑してしまった。

千歳は俺と違って恋愛にはニブく、誰かを好きになったと相談されたのは初めてだった。

だけど生徒会長を中高と務め、容姿も悪くなかった千歳はそれなりにモテていた。付き合った彼女だっていた。だだ、その彼女が好きなのかと聞くと、いつもはぐらかされていた。

ああ、きつと好きかもわからないのに付き合ってるんだな。ということも思っていた。

そんな千歳に、好きな子が出来たと言われて驚かないのがおかしい。爆笑した俺を千歳は本気になって怒っていた。

『なんだよ！そんなに笑うことないだろ！！やっぱりお前に言うんじゃないかった！！忘れろ、忘れてくれ、総一郎！いいか？お前は何か聞いてない。そうだろ？』

と威嚇するような声で言われても、全然怖くない。きつと電話の向

こうでは、眉間に皺を寄せ、青筋立てて怒ってるんだろう。容易に想像はつく。

俺は笑いすぎて流れた涙を拭い、ようやく話せるようになったが、千歳はまだ憤慨していた。

『ところで、子供達元気か？前会った時は、美奈ちゃんがまだよちよち歩きしてた頃だから、大分大きくなっただろ？』

「ああ、二人ともかなりでかくなったよ。秀人はもう小学生だしな。」

『そっかー、そんなになるか。俺達も年取るはずだよなあ……。そうだ。沙羅は？元気か？』

「……多分な。」

『多分？多分ってなんだよ。』

「千歳、お前、俺が結婚する時言ったよな。子供が生まれるからじやなく、沙羅を愛してるから結婚するんだろって。確かに、俺は生まれてくる秀人に責任を感じたし、沙羅を愛してた。だけど、今は正直わからない。」

『……もう駄目なのか、お前達……。』

「ああ、駄目だと思う。」

美奈が生まれてから、半端じゃなく忙しくなった俺は、ほとんど家に戻らない日々が続いた。そんな俺に腹を立てた沙羅とはいつも喧嘩をしていた。

久し振りに家に帰っても、喚き散らす沙羅と一緒に居たくなくて更に仕事にのめり込んだ。

レディースラインだったのも更にその喧嘩に拍車をかけた。

初めに作ったドレスの未亡人との関係を疑われたのだ。それだけではなく、コレクションで出演するモデルも邪推された。

「いい加減にしろよ！浮気なんてしてるわけがないだろう！！仕事しかしてないのに、浮気出来るわけないだろ！？」

「あなたはいつもいつも、仕事仕事仕事！！子供達を私に押し付けて、自分はある華やかなファッションの世界に生きてる。私だって戻りたいのよ、あの世界に！！」

「は！？沙羅、お前戻る気なのか、モデルに。」

「そうよ、悪い？私だってまだまだ若い子には負けない位の自信はあるわ！」

「子供達はどうする。」

「ベビーシッターを雇えばいいじゃない。私はもう子供の面倒なんて見たくないもの。」

「お前それでも母親か！！」

「何よ、自分だってたまにしか帰ってこない父親のくせに、私に偉そうな事言わないでよ!!」

回を増すごとに喧嘩は酷くなる一方で、既に子供達も気付いている。自分達の両親はもはや修復不可能なのだ。

その証拠に、秀人が俺に向ける視線が全てを物語っていた。

もういいよ。

と。

結局、トップ就任から1年後。

俺と沙羅は離婚した。

3：結婚と離婚（後書き）

ランウェイとは、コレクションで歩いてる長い道の事です。

それとアメリカの研修医制度に関しては、かなりの誇張もあるかもしれません。

ただ、1年間のインターン（新人）、ゝ6年のレジデンシー（まだ半人前の医師）、その後のアテンディング（教える立場の医師）に関しては間違っていないかなーと思います。多分…。

フェローシップとは更にその専門職を極めたい人が、推薦を受けてやれるやつ…らしいですが、詳しくはググって下さい…（汗）

4：歪んでしまった日常

沙羅と離婚した俺は、更に仕事へ力を注いだ。

仕事は嫌いじゃない。むしろ、離婚した虚しさを埋めるためにしていたと言っても過言ではないだろう。

ワーカホリックなのは自覚していた。

だが、そのおかげで『Dupont』は更なる飛躍を遂げることになる。

『Dupont』はイタリアを飛び出し、パリにも店を構えるようになり、それと同時に、パリ・コレクションも行った。

ビジネス向きのミラノと違って、華やかなパリコレに出展出来るのは単純に嬉しかったし、楽しかった。

その分責任と重責も増えたが、ランウェイを歩いて、喝采を浴びる事がそれを癒してくれた。

パリコレに出展する際に、出演するロシア人モデルと関係を持っていた。

上昇志向な彼女は、最近人気急上昇なブランドのトップデザイナーの俺と関係を持つことで、『Dupont』の専属契約を結びたがっていたのがありありと匂わせていたのだが、俺はそんな浅はかな彼女をなかなか気に入っていた。

別れた沙羅が浮気していたのは薄々気付いていた。

いつから始まったのかは知らないが、別れる数年前から年下のカメラマンの男と関係を持っていた。

それをはっきりと気付かされたのは、事もあるくに秀人の言葉だった。

「母さんはさ、もう父さんじゃない人を愛してるんだよ。」

そうはつきり言われた事で決心が付いた。

離婚した際、沙羅は親権と養育権を放棄する代わりに、俺の財産の半分を持って行った。

婚前契約を結んでいなかったことが災いしたが、面会権すらも放棄した彼女に呆れて、大人しく財産を渡すことを了解し、俺達は呆気なく結婚生活に終止符を打ったのだった。

パリでのファッションウィークが終わって、ロシア人の彼女との関係をすっぱり切った。

だんだんと厚かましくなってきた彼女を煩わしく思い始めてきた頃に、ちょうど、パリコレが終わったのはちょうど良かった。

野心的な女は沙羅だけで十分だ。

それ以後、俺は仕事と女にのめり込むことになる。

仕事では大コレクションを行い、評判も上々。俺は高い名声を得た。

『Dupont』創設以来の最盛期の始まりである。

私生活では、そんな話題の人物である俺が、派手な女性関係を送っている事を面白がって書き立てるタブロイド詩とパパラッチに追いかけられた。

ある雑誌で『結婚したい男性』と『離婚したセクシー男性』にも入ったおかげで、更にパパラッチに追いかけられる事になった。

慌ただしい毎日を過ごしているせいで、子供たちと疎遠になっている事に気付けなかった。

あれだけ沙羅と子供たちの事で揉めて離婚したのに、その子供たちを蔑ろにしている自分。

広い家に子供と家政婦、ナニーだけを残し、たまに帰るだけ。パリだけではなく、NYや、ロンドンにも出店したおかげで、何ヶ月もの間顔を合わせる事が無いなんて事はザラ。

学校行事にも出席出来ず、秀人が所属しているサッカークラブの送り迎えも出来ない。

美奈に至っては、起きている姿を見たのがいつだったのか。それすらもわからなくなっている。

二人の誕生日や感謝祭、クリスマス。

それを一緒に過ごしてやる事が出来なかった。

気が付けば、二人に話しかけられる事も無くなっていた事すらわからなかった俺は、今や最低の父親に成り下がっていた。

そんな俺を、千歳は厳しい言葉と、有無を言わさぬ態度で諫めた。

シカゴに仕事で行った俺は、千歳と会う約束を取り付けた。久しぶりに会った千歳は、気になっていたという彼女と付き合い、順調に交際をしているという。

医者としての真つ当で順調なキャリアも、本気で惚れた彼女との交際も。

何もかもが俺とは違う。

「お前、何やってんだよ。」

「何って、何だよ。パーフェクトな毎日を過ごしているけど?」

「子供達をほったらかしてか。お前、最近子供の顔いつ見た。もちろん話なんてしてないんだろ?」

あまりに的をえた言葉に返事を返すことが出来ずに、言葉を濁らせ他の話題に移ろうと思ったが、眉間に皺を寄せて、渋い顔をした千歳はそれを許さなかった。

「総一郎、俺は沙羅と別れたのは正解だったと思ってる。あのままじゃお前たちは悪くなる事はあっても、良くなる事はなかっただろうからな。だけど、それと子供たちとは別問題だ。お前も傷付いてるかもしれないけど、それ以上に傷付いてるのは秀人と美奈だぞ。わかってるか、その事。」

「…うるさい。」

「聞きたくないことには耳を塞いで。見たくないことに目を閉じて。総一郎、お前はあの子たちよりガキだ。」

「…っ！うるせえんだよ！わかった事言ってんじゃねえ！お前に俺の何がわかるっていうんだよ！！」

「わからないから言っただろ！お前が自分で自分の事すらわかってないのに、それを俺や他人がわかるとでも思っただけか！？いい年して甘ったれた事言っただけじゃねえぞ！！」

そこが人目に付く場所だとか、俺がパパラッチに追いかけられる立場だとか。

頭に血が上った俺はそんな事を全く考えずに、感情の赴くまま千歳を思いっきり殴っていた。

「いつ…てえな！！この野郎！！」

そう言っただけで千歳も俺に殴りかかり、その場は俺と千歳の取っ組み合いの喧嘩の場と化していた。

最終的には、周りにいた人達に羽交い締めになされて止められた。

警察を呼ばなかったただけで、俺達二人はボロボロのまま千歳の勤めている病院に運ばれた。

『チトセ！一体その顔どうしたの！？…それに…ボロボロだけど…まさかソウイチロウ・キリユウ！？』

『ドクター！まさかあなたがミスターキリユウを殴ったの？』

看護師が言ったその言葉にギロリと俺を睨んだ千歳は、痛そうに顔をしかめた後、むっつりと黙り込んだ。

お互い怪我を治療してもらったのはいいが、如何せん、殴った場所が悪かった。

千歳の口元は切れ、頬には痣が出来ている。俺も似たような状態なのだが、これではしばらく公の場所には出られないだろう。

そういえば、シカゴには仕事で来ていたはずで、明日の予定をキャンセルしようと電話をかけに病院のベッドを離れた。

外に出て、携帯で秘書に連絡を入れ、渋られはしたが明日の予定をキャンセルした俺は、ふと景色を眺めた。

暫くぶり見た空は、青く澄み渡っている。雲も出ていなく、ただひたすら青い空を見上げた俺は、知らずに深いため息を付いた。

余りに澄んだそれは、今の俺には眩しすぎる。

千歳に言われた言葉を思い返し、ズキンと痛む胸を押さえて、その場に立ち竦む。

あいつが言った事は全て事実で。

事実だからこそ、腹が立って、俺の今の余りに荒んだ現実だったからこそ千歳には知られなくなかった。

俺は見たくない現実——沙羅の浮気と離婚——に目を瞑り、聞きたくないこと——子供達との関係——には耳を塞いで、ひたすら仕事と女に逃げている。

ランウェイでの喝采。

一時の快樂。

これを、中毒と言わずになんと言うのか。

誰にも相談することも出来ず、自分のことすら見失いそうで。

美しかったはずの夢が、どす黒く塗りつぶされようとしているのに、何も出来ず、足掻く事すら出来ないでいる。

俺には、もう、何もかもがわからなくなっていた。

5：出逢い（前書き）

今回は短いです。

5：出逢い

『あの、すみません。どいてもらえますか？』

その声で我に返った。

見上げていた青空から目を離すと、俺の目線はかなり下にティーンエイジャーくらいの女の子が立っていた。

その手には沢山のカサブラン力を抱えて。

俺の身長は180を超えているが、彼女の身長は160cm無いのだろう。顔がかなり上がっている。

小さな彼女は俺を見上げて驚いた表情をしている。

「え…桐生総一郎…？」

「そうだけど、君、もしかして日本人？」

「はい。って、顔…どうしたんですか。痛そうですけど…」

「ああ…。なんでもないよ。」

「何でも無いってわけじゃないですか。そんなに痛そうなのに。来て、私、ここにいる腕のいい医者知ってますから。ほら、来てくださいよ。」

「いや、もう治療してもらったから。」

「いいから、早く！後遺症でも残ったらどうするんですか、そんな男前の顔なのに、もったいない。」

もったいないって。

面白い事を言う子だ、仕方ない。今出てきた処置室に戻るとしよう。カサブランカを抱えた彼女に、大人しく着いて行った。

それが、俺と祥子の出逢いだった。

6：親友最愛の女

今し方出て来た処置室に戻ると、そこに千歳はいなかった。その事に少しほつとして、ベッドの上に腰掛けてさてどうしたものかと思案する。

俺を半ば強引に連れてきた彼女は、カサブランカに抱えられた様な格好に見えるほど大量の花を病院に持って来ていて、これを置いてからドクターを呼んでくるからちよつと待ってて下さいねと言って席を外していた。

あんなに沢山のカサブランカを一体どうするつもりなのか……。入院患者には見えなかったし、まさか病院関係者なわけではないだろう。どう見繕っても20歳いくかないか、と言うか、ティーンエイジャーにしか見えなかったが、着ている服装を見る限りはそうでもなさそうだった。落ち着いた色合いのシャツは確かに似合っていたし、体にフィットしたパンツスタイルも好ましい。

そこまで考えて自嘲した。どうやら本格的にワーカホリックになりかけているらしい。そろそろ自分の今後の人生の生き方を考える時期に差し掛かった頃合なのかもしれない。その時脳裏にある言葉が浮かんだ。

『中年の危機』

げ。

「何百面相してんだよ。」

「ヤバい、千歳。俺って中年？」

「は？」

「うわぁ、マジかよー！俺ってもう中年なのかー！！」

「どうした？頭も打ったか？CT撮ってやろうか？」

心配顔で俺を覗き込む千歳の顔は少し腫れていたが、仕事には差し支えなさそうで安心した。だが、千歳は医者だ。大事なのは顔じゃなくて、手だ。俺は千歳の右手に視線をやると、包帯が巻かれていた。

「お前：手は大丈夫なのか？」

「手？ああ、何とか。ただ3日はオペ出来ないから、その間は溜まった書類仕事だって外科部長に叱られたけどな。」

「…そうか。悪かったな。」

「本当だよ！お前いきなり殴るなよな！。俺はお前みたいにケンカ慣れしてないの知ってるだろ？全くよお。」

ぶすつとぶすくれた千歳を見て、くはつと笑った。別にケンカ慣れをしているわけじゃない。ただ高校の頃に少し荒れた時期があった

というだけの事だ。

当然今はデザイナーとしての自覚もあるし、いい年した大人が殴り合う機会もそうそう無いだろう。

「で？中年って何の事だ。」

「シャレになんねえ。俺、中年の危機ってやつかもしれねえ…。」

「お前が？そうか…いや…うん…うん…」

「目が笑ってるぞ、千歳…」

そこまで言うと、千歳は駄目だ、耐えられない！と吹き出して大笑いを始めた。病院中に聞こえてるんじゃないかと思うほど、デカい声で爆笑しているこいつを睨む。

こっちはシヨックを受けてるっていうのに、こいつは…っ！軽い殺意すら湧いた時、廊下からさっきの女の子がこちらに向かって走り寄ってくるのが見えた。

「いたーっ！」

その声にえ？と振り返った千歳は彼女の顔を見て破顔したが、当の彼女は千歳の顔を見て折角の可愛い顔を盛大にしかめた。

「千歳君、どうしたのその顔。」

「うん？こいつに殴られた。」

「こいつ？」

千歳に指を刺された俺は思わずその手を叩き落としたが、千歳は俺に構わず彼女の方ばかり見ているのを見て、ははあと笑った。

この子が千歳の言ってた彼女か。確かに可愛いのは認めるが、年がヤバくないか？千歳ってロリコンだったっけ？いくら何でも、ティーンエイジャーは不味くないか？

いろいろ考えていると、彼女が俺の方を見ていたので、急いで意識をそっちに戻した。

「桐生総一郎が千歳君を殴ったの？」

「…そうだよ、お嬢ちゃん。俺が千歳を殴った。ま、こいつも殴り返したけどな。それより君、千歳の彼女なんだろう？お嬢ちゃんじゃ若すぎるだろう。こいつは俺と同じ年だぞ？」

「お嬢ちゃん！？聞いた、千歳君？この人、私の事お嬢ちゃんって呼んだ！ねえ千歳君、この人すごい失礼！！…って…殴り返した？千歳君も殴ったの？」

ギロツと睨まれた千歳は急いでそっぽを向いたが、彼女はぐいっと千歳の顔を自分の方に向かせて、殴ったの？と詰問していた。

「いや、あのな様子、俺は殴られたからつい手が出て…」

「つい？つい殴った？どの手で殴ったの？この手？あー！！包帯巻いてるじゃない！ジャクソン部長に怒られるよ！？」

「もう叱られて、治るまで書類仕事だって言われたよ。それより様子、ちょっと落ち着いて…」

「落ち着いてるわよ、すつごくね。全く…千歳君は医者としての自覚がないの？」

「あるさ、もちろん。ただどな、男としてのプライドが…」

「男のプライドは医者のカリヤより重いのか？わかってる、千歳君。もし間違った結果になったら、医者のカリヤは終わるんだよ？本当にわかってる？」

「はい、仰る通りです。ごめんなさい。」

「謝るのは私じゃないでしょ。ちゃんと桐生さんに謝らないと。」

ふんつ！と腰に手を当てて千歳を説教している彼女を見て、目を丸くした。この子、なかなか凄い…と言うか、千歳を尻に敷いてないか？

俺の考えてた事がわかったのか、千歳がじろりと見た後にぼそつと謝った。それが良かったのか彼女の機嫌が直り、ようやく紹介してもらえる事になった。

「…さて、順番がおかしくなったけど、祥子。こいつを紹介するよ。知ってると思うけど、桐生総一郎。俺の幼なじみなんだ。総一郎、彼女は姫川祥子だ。気付いてるだろうけど、俺の彼女。」

「よろしく、お嬢ちゃん。だけど千歳、この子いくつなんだ？いくら何でもティーンエイジャーはマズいだろう。」

と言うと、千歳は顔を覆って天を仰いだ。その様子に疑問を持った俺は、祥子と呼ばれた彼女をマジマジと見た。
…見間違えか？黒いオーラが見えるんだが…。

「ティーンエイジャー…？私が？」

「違うのか？」

「私は29ですっ！！」

「…今なんて…？」

「三十路前の女に、ティーンエイジャーだなんてイヤミ！？千歳君、悪い事は言わないから、この人と交友関係絶った方がいいよ！！」

「…おい千歳、本当なのか？」

信じられない告白に千歳に助けを求めたが、奴はうんと頷いただけだった。

奇跡だ。こんな29歳見たこと無い。何処からどうみても、29には見えない。

それも、彼女はこの病院の看護士と言う。どうにも信じられない事実ばかりで、思わず口元を覆ったが鈍い痛みで顔をしかめた。それを見た彼女は急いで口元のガーゼをそろそろと剥がして、眉を顰^{ひそ}めた。

「うわあ、やっぱり痛そう。千歳君、思い切り殴ったでしょう。ねえ、桐生さんの手は大丈夫？」

「手？ああ、痛いことには痛いけど、千歳程大袈裟にしなくても大丈夫だろ。あいつの方が思い切り殴ったしな。」

「そこは総一郎、お互い様だろ。」

「はは、まあな。さてと、俺はホテルに戻る。明日は休みになったしな。ゆつくり観光でもしてるよ。」

ベッドから立ち上がりその場を後にしようとしたら、凄い勢いで腕を引かれた。何事だと思つて、引かれた腕を見ると小さい彼女が俺の腕を掴んで放さない。呆れて千歳を見ると、千歳も不思議そうな顔で彼女を見ていた。

「痛いんでしょ？じゃあちゃんと治療しなきゃ。」

「いや、だから大丈夫だって。おい、千歳、お前の彼女だろ。なんとかしろよ。」

「うーん。祥子は一回言い出したら聞かないからな。大人しく包帯でも巻かれれば？祥子、縫合する程の怪我してないだろ？だったら一応写真撮らせた方がいいか…。おい、総一郎。しばらくここにいろ。」

「はあ？俺、今帰るって言ったよな？」

「「我慢しろ」して」

はーっと息を吐いて仕方がないので、こいつらの言う通りにレントゲンを撮られ、大げさなほどの包帯を巻かれた。千歳は仕事があると、行ってしまったが。

包帯を巻いてくれたのは彼女だった。何度見ても29歳には見えな顔なをじっくり見ていると、視線に気付いた彼女は露骨に嫌な顔をしていたが、笑っておいた。

「なあ、なんで看護師の仕事をしようと思ったんだ？君の背格好じやバカにされたりするだろ？」

「むつ。やつぱり失礼な人だわ。別にバカにしたかったらしたらいいのよ。私は私の仕事をするだけだから。そうね、看護師になったのは、医師より身近に感じられる存在だから。これで答えになるかしら？」

「へえ。てつきり千歳の側にいたいからなんだと思ったが…。痛つ！ー！おい、今わざとだろ！」

わざとらしく驚いている彼女を睨みつけたが、動じている風はない。カチャンと器具を置いた祥子は、俺の目を真っ直ぐ見ていたので、俺も逸らさずに彼女の目を見た。

「千歳君は関係ない。彼と付き合ってるのは事実だけど、私が看護士になったのにはちゃんとした理由があるの。貴方だってちゃんと理由が合ってデザイナーをしてるんでしょ？」

「……」

「最近じゃ私生活の方が上手く行っていないみたいだけど、それじゃあ近いうちにでも破綻するわよ。ま、私には関係のない事だけど。千歳君の知り合いだから、一応言っておくわ。どうせ、貴方の周りの人はおべっかばかりで、本音で言ってくれる人なんていないでしょうから。」

『シヨウコ！こっちの患者を手伝ってもらえるかしら！』

『わかった！手が開いたから、今行くわ！』じゃあ、お大事に。」

そう言っただけで彼女はカーテンの奥へ消えて行った。

ズケズケと言いくらい事を言ってくれる。こんな女は俺の周りにはいなかった。腹も立つたけれど、事実なだけに否定は出来ない。でも彼女の行った通り、確かにトップに就任してから褒める奴らばかりだった。中には批判する奴もいたけれど、俺は気にしていなかったし、私生活には絶対踏み込んだ発言はさせなかった。勿論、付き合ってた数多の女達にも。

そう考えて見ると、俺に親身になって叱ってくれたのは千歳だけだった。いや、彼女もか。

そうか、だから彼女なのか。

何故千歳が祥子に惚れたのか、その理由が少しわかった気がした。

暫くすると千歳がまた現われて、骨には異常無しだと教えに来てくれた。

「お前の女、なかなか面白いな。」

「だろ？」

「なんでお前が惚れたか、わかった気がするよ。…さて、今度こそ帰る。帰っていいんだろ？」

「ああ。しばらく包帯が煩わしいけど、我慢しろ。そうだ、総一郎、お前いつまでこっちにいるんだ？」

「3日後にはミラノに帰る。そろそろ子供達の顔も見なくなっただな。」

そつかと笑った千歳を見て、俺も笑った。

7：昔の約束

「お前ら結婚しないのか？」

次の日の夜、千歳と祥子にディナーへ誘われた。どうやらまだ彼女は帰って来てなくて、千歳は今日は休みだそうだ。

二人が呼んだのは一軒家で、聞くと彼女の母が住んでいたものらしい。千歳が祥子と付き合いだした時にタイミングよく、千歳が住んでいたアパートの水道管が破裂し、部屋中が水浸しになって以来ずっとここに住んでいるとの事だった。

千歳達が付き合い出してから、既に年数は経っているはずだ。だったら、結婚しないのかと聞いたら、千歳は苦い顔で笑った。

「祥子がイエスって言わないんだよ。…まあ、無理に結婚なんてしなくてもいいんだけど、ちよつとなあ。」

「プロポーズはしたのか。」

「ちゃんと指輪も持ってた。だけど『看護師の仕事が楽しいからまだ結婚とかって考えられない』って。」

「なるほどな。」

誘われたと言うのに、何故か俺が料理を作らされているので、前菜としてカプレーゼ（あとがきで説明）でも作ろうと思い、トマトをスライスしながら千歳の悩み相談を聞いていた。

千歳は料理が作れない。と言うか、味オンチ。だからこいつに味付けを任せると、とんでもない一品に仕上がる。それを身に染みてわかってる俺は、千歳をキッチンのテーブルに座らせたまま話を聞いていた。

「悠長に構えてるけど、俺達もう三十八、誕生日が来れば三十九だぞ。今時四十で独身とかってザラにいるけど、お前んとこの親も何だかんだ言ってきたるだろ？」

「そうなんだよ…。姉ちゃんと飛鳥まで一緒になって騒いでるよ…。」

げんなりした様子の千歳を見て苦笑した。

千歳には一つ上に姉、みつる深都留、と二つ下に妹、あすか飛鳥がいる。姉妹の真ん中に挟まれた千歳は、まー、よくよく彼女達からパシられていた。なまじ、千歳の性格もどこことなくのんびりしているのも、パシりにされた原因でもあったんだろうが。

しかも名前を見た限りでは、全員の性別が判断出来ない。何だってそんな判りづらい名前を付けたんだか…とよく千歳はボヤク。

「深都留姉ちゃんと飛鳥元気にしてるか？」

「元気過ぎてうるさいくらいだ。飛鳥にもようやく子供が出来たみたいだしな。今年の秋には生まれるって言ってたよ。」

「本当か？良かったな。」

ああと言った千歳は本当に嬉しそうで、俺も安堵した。結婚後、なかなか子宝に恵まれなかった妹夫妻を案じていたのは、日本にいる両親や姉兄だけではなく、少なからず俺も気にはかけていた。

「じゃあ、日本にいる孫が増えておじさん達は大変だな。お前も甥っ子や姪っ子が増えていいじゃないか。日本に帰った時、会いに行ったりしてるんだろ？」

「行ったら行ったで、日本に帰って来いって小言ばかりだ。もう義兄さんが跡を継いだから、今更俺が店に戻るつもりはないし、オヤジも店をどうのこうのなんてつもりは無いんだけろうどな。だけど、日本には飛鳥の旦那だっているし、俺はこっちの方が性に合ってる。」

「…そうか。」

千歳の実家は、老舗和菓子屋を営んでいて、深都留姉の旦那はそこ
の跡取りとして婿養子に入っている。そして、飛鳥の旦那は経理を
担当しているのだが、本来なら息子である千歳に跡を継いで欲しい
と思っていたのだろう。だが、千歳の両親は快く医師になる夢を許
した。アメリカに行く決めた時も、反対らしい反対はしなかった
らしい。

「それでも日本に戻って来て欲しいんじゃないか？なんたって息子
だしな。」

「わかってるさ、それは。だけど、俺にはここでやるべき事があるからな。まだまだ学ぶ事ばかりだ。いずれ戻るかも知れないけど、今はまだ考えてない。」

そう言つて千歳は、ははつと笑つた。

既にカプレーゼは仕上がり、千歳はそれを見て感嘆していた。つまみ食いをしそうだったので、仕方なくトマトの切れ端とモツツアラを串に差して渡してやると、嬉しそうに食べていた。

この家に来る前、買い出しをする時メインは何がいいんだと聞いたら、肉が食いたいと言つていたので、ポルペッタ（あとがき説明）でもいいかと思い、割と多めに挽き肉を買つた。ついでに、カルボナーラも食いたいと言う、ディナーに招いた本人とは思えない発言を思い出し、パスタも買つていた。

今からポルペッタを作るのはいいが、問題はパスタだ。いつ祥子が戻つて来るかわからないので、茹でる事が出来ない。どうせだつたら出来たてを食わせたいと言うのもあるし、招かれた俺が何で全部作らなければいけないんだと言うちょっととした疑問も感じていたのも本音としてはあつた。

「千歳、お前の彼女はいつ帰ってくるの？」

「えーっと…今6時だろ。もうすぐ帰ってくると思う。」

「仕事？」

「いや、今日は叔母さんの所に行くつて。近くに住んでるんだ。」

「ふーん。だったらなおさら、早いとこ結婚しとけよ。子供だって欲しいんだろ？俺は二人いるけど、高校ん時の同級生とかもう大半が子持ちだぞ。」

「うるさい！いいんだよ、俺らは俺らでっ！」

挽き肉をこねていた手を止めて、千歳を見る。

まさかとは思うが…こんな長い期間付き合っておきながら、まさか手を出してないとかそんなバカな話があるわけがないと思いつつ、恐る恐る聞いてみた。

「…千歳…お前、あの子と清らかな関係だとか言わないよな…？」

そう問われた千歳はポカンとしたが、次の瞬間、「馬鹿かお前」と怒鳴られた。

「中学生じゃあるまいし、なにその清い関係！結婚しようとか言ってるのに、そんなのあるわけないだろ！」

「いや、だつてよ…」

「やることはちゃんとやってますー！！お前みたいにデキ婚なんかしませんー！」

「…っ！なかなか痛い所を付いてくるじゃないか、千歳君。じゃあ何か？ドラマでお馴染みの当直室でのセックスは経験済みか？」

「当たり前ですよ、シニョール。」

「ほーお、やるねえ、千歳君。」

「シニョール、君みたいに、エーゲ海のヨット上でのセックスや、カリブ海の個人所有の島での情事も魅力的ではあるが、俺らの当直室には勝てないよ。」

ははははと口元だけで笑い合っているとカタンと音がして、見るとキッチンの戸口に真っ赤な顔をした祥子がプルプルと立っていて、千歳は反対に顔面蒼白になっていた。

「バカじゃないの、二人とも！！！！何が当直室よっ、何がエーゲ海よカリブ海よっ！！！！信じらんない、バカバカ！！！！」

「だからごめんって！ほら、総一郎、お前も謝れって！」

「…恐妻家になりそうだな、千歳…。」

そう呟くとギロッと祥子に睨まれ、ジト目で千歳に恨みがましく睨まれた。

なおも文句を言い、千歳を叱りつけながら用意された料理をペロリ

と平らげた彼女は、ドンつとワインを一本自分の方へと寄せ、手酌でグラスに注ぎ、一人グビグビ呑んでいた。

こんなにワインを豪快に呑む女は見たことがない。面白い物を見たと思いつつも、これじゃあ悪酔いするばかりだと思い、止めようとする逆千歳に止められた。

「ワイン一本じゃ祥子は酔わないから。だから黙って吞ませてやつて。」

「強いんだな。」

「…病院近くのバーじゃ、祥子は酒豪で通ってる。テキーラのショットなんて当たり前に飲み干すわ、マティーニをオリーブ入りのジューズだとか言うわ、果てはアースクエイクを呑んでもケロツとしてる。バーテンは呆れて、祥子を酔わす酒なんて無いって嘆いてるよ。それで居て、肝臓が何ともないんだ、不思議でならない。」

アースクエイクを呑んで何ともない女…。なる程、バーテンが白旗を上げるわけだ。

千歳があまり呑まない質なので、一緒にいる彼女の酒豪っぷりは目立つだろう。やはり千歳は恐妻家になりそうだ。

酒もいい感じに入り、腹もこなれた頃、聞きたかった事を彼女に聞く事にした。

「おい、お嬢ちゃん、お嬢ちゃんは千歳と結婚しないのか？」

「お嬢ちゃんって呼ばないでよ！」

「はいはい、わかったわかった。で、答えは？」

「本っ当、腹がたつわね。…千歳君は好き、だけど、結婚となると話は別。」

「祥子、」

「わかってる、わがままだって言うのは。だけど、千歳君が、私みたいな育ち方をした女と結婚しちゃダメだと思うの。」

育ち？

一体何の事だと思いつつも、黙って聞いていた。部外者の俺がそこに立ち入るべきではないと思ったから。

「祥子、俺は何度も言ったよな。俺は気にしないって。日本にいる俺の両親や姉妹もだ、祥子が自分をそこまで卑下する必要なんてないんだぞ。」

「それでもだよ。千歳君にはちゃんと両親が揃って、愛情ある家庭で育った人の方がいいと思う。」

「…なんだそれ。馬鹿じゃねーの？」

え？と二人が俺に注目したが、何故だか俺は無性に腹が立って仕方

がなかった。

話の内容と二人の表情から、大体の事は察しが付いた。

祥子には両親が揃っていない。多分、父親が。

だけど、両親が揃っていたって俺みたいにその親から愛されていないかったりするし、逆にシングルで育てられたとしても、ちゃんとした愛情を注いでもらっていれば問題ではないはずだ。

俺が見る限り、千歳は祥子を愛しているし、祥子もそうだ。それなのに、育った環境云々を二人が一緒になる為の妨げになるだなんて、全く馬鹿げた戯言にしか聞こえない。

沙羅との結婚が破綻し、二人の子供達を放任していた俺が言うのもなんだが、千歳と祥子は結婚してもいい夫婦になれると思う。

そう思うがまま、二人に説教していた。

それに

「祥子、お前が結婚する時は、この俺がウェディングドレス作るんだぞ。嬉しいだろ？」

「…えゝ！？何それ、もう決まってるの？」

「…よく覚えてたな、その約束…。俺ですら忘れてたぞ。」

千歳の抜けた返答に、がっくりと肩を落としそうになったが、約束を思い出したのかニヤニヤしだした千歳は、俺にワインを注いだ。

「桐生総一郎がデザインするウエディングドレスねえ。マスコミが騒ぎそうだけど、勝手に作ってお前んところの会社と契約違反とかにならないのか？」

「あー…あくまでも友人に無償って形にするから大丈夫だと思う。そもそもマスコミに発表する気はないし、祥子も嫌だろ？自分の写真が各国の雑誌に出るの。」

「…う…嫌だわ。ん？…ねえ、ちよつとまってよ！もう結婚する気なの？」

「しないのか？あーあ、可哀相に千歳。フられたらイタリアまで来い。夜を徹して遊びに連れて行ってやるからな。なんだったら、エーゲ海クルージングでもするか？」

「バカじゃないの！！千歳君がそんなのするわけないじゃない！！」

「いやー、千歳だつて男だし。なあ、千歳？」

「エーゲ海か…それもいいかもなあ。」

「やだ千歳君、本気！？ちよつと、千歳君をエロスの道に誘い込まないでよ！」

エロス…

だけど、そろそろ止めないと、泣きそうだな。千歳もそれがわかったのか、「冗談だよ」と言いながら頭を撫でていた。

一人ぶすくれた祥子は、またワインをグビグビ飲み、俺が作った人

数分のティラミスを綺麗さっぱり一人で平らげ、さつさとソファーにグラスを持って移動してしまった。

祥子を見ながら、テーブルでワインを呑んでいた俺と千歳はしみじみと語らう。

「おい、あいつの胃袋どうなってんだよ。あれだけ食って、まだ酒呑んでるぞ。」

「それであの細さだろ。本当にどうなってるのか不思議だよな……。」

「で？お前はどうすんの？」

「ははっ！なあ…総一郎、約束、忘れてないよな。」

「おう。だけど、式挙げる時期は決めておけよ。いくら俺でも、ウエディングドレス作るのは初めてだからな。デザインもだし、製作期間もあるから。」

「ああ、わかった。」

その一ヶ月後。

千歳から一本の電話が、イタリアにいる俺の携帯に入った。

年明け早々に祥子と式を挙げるから、ウエディングドレスを作って

くねじ。

7：昔の約束（後書き）

カプレーゼ：トマト、モッツアレラチーズ、バジルがあれば簡単に出来る料理。薄切りトマトと、同じ幅に切ったモッツアレラ、バジルを重ねて並べて後はオリーブオイルと、塩コショウで味を決まるだけのお手軽料理。

ポルペッタ：イタリア版ミートボールみたいな感じ。パルメザンチーズと、セージが入ってます。ちなみに、総一郎が作ったのにはニンニクも入ってます。

8：家族

千歳がようやく祥子から結婚の了承を得たという連絡をもらってから一週間。

俺は悩みに悩みまくっていた。

というのも、基本的に俺はウェディングドレスを作ったことがない。『Dupont』のデザイナーということで、数え切れないほどのパーティドレスやフォーマルドレスをデザインしてきたが、今回のウェディングドレスは勝手が違う。

たくさん資料やなんかを見てても全くイメージが頭に浮かばない。結婚式で着るウェディングドレスは女の子にとっては一生ものだというのもあるし、そもそも俺がデザインするっていうことになると下手なものは作れない。プライドの問題もあるし。

参考になればと思って家に帰り、娘の美奈に聞いてみる事にしたのだがあまり参考にならなかった。

「ふわふわして、プリンセスみたいなの。もちろんヴェールは長いよね！女の子の夢みたいなのがいいわよね！」

美奈は幼くして沙羅と別れたこともあって、母親というものをあまり知らない。

かと言って父親である俺が近い存在だったかというところでもない。

美奈はほとんど兄である秀人が俺の代わりになって育てたようなも

のだ。それなのにサッカークラブに所属して男の子らしい秀人と一緒にいたわりに、妙にお姫様思考の持ち主である美奈はドールハウスやお人形遊びが好きなので、それで参考になるのかと思ったのだが…。

久しぶりに見た美奈は大大大きくなっていた。こんなになるまでの成長した記録を俺は知らない。

ナニーが気を利かせて写真などを撮っていたし、自分のオフィスにも子供達の写真は飾ってあるのだが、何が好きで、何が嫌いでとかの事は全く知らないと言っても過言ではない。

こんな状況では確かに千歳に怒られるわけだ。ふっと自嘲の笑みを零しながら自分の書斎へと足を運んだ。

ウェディングドレス。

ブライダル関係の本や、資料。有名セレブの結婚式の写真などを流し読みしても、やはりピンとくるものはなかった。

しかし、あのちんちくりんな子供のような祥子がドレスを着た様子が目に浮かばない。もしかしたらそれがイメージがわかない原因なのかもしれない。一応はデッサンしてみるが、やはりしっくりこない。

腕組みをして洗面をつくる。

もしかしたら初めてのパリのコレクションの時よりも難しいかもしれない。

千歳はいつ結婚式を挙げるか言っていなかったが、多分年内中なのかもしれない。となると、手間のオンパレードのウェディングドレスは早々に着手しなければならないのではないか。美奈の言っていたヴェールのある。ああいうのも作らなければならないのか？俺が。

そういえば、ドレスを作るにはちゃんと実寸データが必要だ。今の所はそれが無いために、ぼんやりとしたイメージのままでデザインしていたがアメリカに行って測ってこなければいけないだろう。さすがに千歳の妻になる女なのだから、二人きりでの計測は出来ないだろうし、男の俺に測られるのも嫌がるだろう。

誰か一人スタッフでもいいので連れていけるのかと思ったが、さすがに社の人間は連れていけないかもしれない。そもそもまだ社に言っていないのもある。もし許可が出なかったら無理を押してでも…というか社に内密に作ればいいだけの話だし、もしも発覚すればチーフ解任の可能性もゼロではない。

独立

その事も前々から少なからず考えていた。

確かに『Dupont』のデザイナーというポジションは充実した毎日を送れているし、大金も手に入る。今住んでいる家もデカイし、調度品も多数ある。海外にも何件かアパートを所有しているし、島も持っている。

しかしそれで得たモノは、自分が欲しかったものだったのかと問われれば正直、否なのかもしれない。

俺が育った家は、外交官の父は多少なりとも政局に絡む人間だった。社会的に高い地位と立場によっては優れた人間だったのかもしれないが、それを俺はいいとは思えなかった。選民意識に凝り固まった裏の顔と人を馬鹿にしたような憎憎しげな顔。

家族と言うものはお飾りでしかなかった父親に、それに意義を全く唱えない母親。その母親に溺愛されて、甘やかされて育った弟。

家族というものを俺は知らない。

あれが家族だったのかと言えばそうなのかもしれないが、俺にとっては家族ではない。

だからこそ、自分の持った家族を大切にしたかった。それなのに、仕事の忙しさにかこつけて自分の父親の徹を踏む事を恐れていたのかもしれない。

独立を考え出したのは深層心理の中でそういった事を考えていたのもあったろう。

独立したら、日本に帰ろうと思っていた。そして、そこから新たに自分のブランドを立ちあげるのもいい。

とりあえずは秀人も美奈も連れて日本に帰るのはいいとして、それを本人達が喜ぶかどうかはわからない。日本に行くのは年に何回もないし、日本語は喋れてもあつちでの勉強に付いていけるかはどうかだろう。特に美奈は漢字があまり読めないし。

今から少しずつでも教えておくかと考えていると、書斎のドアがノックされた。入って来たのは秀人で、久しぶりに見た息子は年々沙羅に似てくる。それを本人は嫌がっていると思うが。

「どうした？」

「父さんが帰って来てるのも珍しいから、居るときに言っておこうと思って。僕、高校は日本の学校に行こうと考えてるんだけど、駄目かな。」

「日本の？」

「僕、日本人なんだからさ、あつちの学校に行ってみたいんだよ。父さんと美奈はイタリアにいたままでいいよ。一人暮らしするし。」

「…寂しくないか？」

「今更。まあ、まだ小さい美奈は心配だけど父さんもちゃんと面倒見てやってよ。」

困ったような顔をして笑って出て行った秀人を見て、思わず眉間に皺が寄った。

連れて行くかと思っていたのに、まさか先手を打たれるとは。それも、美奈の事でもちゃんと釘を刺していった。

寂しくないかと聞いて今更と答えた息子。寂しい思いをさせていた自覚はある。だが、それを面と言われるのはやはり堪える。

「自業自得じゃないの？」

「五月蠅い。」

「いくら仕事が忙しいからって、子供達ほっぽり出してお色気たっぷりなカノジョ達と遊びまわってたのは事実でしょー。それで堪えるとか言ってるんじゃないわよって話よね。」

「おい、千歳！なんだこいつ！！こんなに口悪い女なんか止めとけ！」

「図星だからって怒らないでよね！」

千歳は笑って俺と祥子の会話を聞いている。

実寸を取るためにシカゴに来ていた俺は、マリベルという助手を連れて来ていた。彼女は秀人と美奈のナニーを務めていた一人なのだが、今は体調を崩して故郷のフランスに戻っていた。ナニーをする前は針子をしていたということもあって、測る事ぐらいなら言う事で今回アメリカに連れて来ていた。

マリベルは祥子の顔を見て、こんなに若い子をよく口説いたわねと千歳をからかっていたのだが、祥子の年齢を聞くと啞然としていた。それを見てまでも祥子は憮然としていたのだが、我に返ったマリベルが慌てて謝って事無きを得た。それから女同士で意気投合したらしく、二人仲良く間仕切りで仕切られた部屋で色々と測っている。

「で？秀人の日本行きはどうするんだ？」

「行きたいって言ってるんだからしょうがない。あいつはあんまり頼み事するような性格じゃないしな。」

「だからー、遠慮してたんだって！パパが構ってくれないんだから我慢するしかないでしょー！？可愛そうな秀人君。こんな歩くエロス男が父親なんてねー。せいぜいエロスの部分で似ないといいわね。」

「……千歳、お前本当にあの女でいいのか。今だったら考え直せるぞ。」

「聞こえてんのよー！！」

「まあまあ二人とも。ま、お前がそう言うなら行かせてやればいいんじゃないか？ただ行きたいって言うてる高校がまた櫻院おういんか。この高校って超進学校じゃないか。秀人は日本語とか大丈夫なのか？」

千歳が言う櫻院というのは、正式には櫻院学園という学校法人が経営している超進学校。俺の弟もこの卒業生だった。櫻院の国公立合格率は普通の学校よりはるかに高く、授業の速度も相当速い。そんな学校にイタリアの学校で勉強してきた秀人が本当に合格するのは不安だった。美奈よりは漢字が読めるとは言え、それでも進学校の入試に間に合うだけの識字率は上げられるのか。

「うーん……」

「結構漢字読めないと駄目だと思うぞ。特に国語の教科とかあるんだからさ。」

「一応は日本語の本とか読んでるみたいなんだけどな。この前リビングに武者小路実篤の本が置いてあったのは見たけど。」

「へー…。勉強家だな。ま、信じてやれよ。それにしても一人暮らし。まさかお前の実家に下宿させるわけにはいかないだろうしな…。」

「絶対にあり得ない。あんなやつらに大事な息子を預けて堪るか。」

俺と両親達の不仲を知っている千歳はそれ以上言わなかったが、そ

れでも未だに俺の実家に対する認識を改めた方がいいぞと忠告している。それを頑なに拒否しているのは自分だが、少しばかりは気になって一応はどうなっているか一年に一回ぐらい、日本に行った時に車の中から実家を見たりしている。

大分老けた父と母。今は父の後を継いで、官僚になった弟。結婚はしたようだが、結婚式には呼ばれていないし、そもそも結婚の報告すらなかった事を考えると苦笑せざるを得ない。

「ま、それでお前がいいなら何にも言わないよ。」

「人間って色々あるからね。無理強いすればするほど意固地になっちゃうのよ、千歳君。」

「終わったの？」

祥子が間仕切りを開けて、こたらに歩いて来た。座る先は勿論千歳の隣。俺はマリベルに差し出された祥子のサイズが事細かに書かれた紙を見ていた。

『ソウ、これがショウコのデータよ。』

『マリベルお疲れ様だったな。』

『いいえ！むしろ楽しかったわよ。こんな可愛らしい彼女に作るウエディングドレスなんて、ソウもプレッシャーがかかるわね！』

『そうだな……。しかし、小さいと思ってたけど、実際に測ると本当

に小柄だな。』

身長が155cmしかない。俺の身長が186、千歳が180あるかないか。それから考えればかなり小さい。実際、祥子が俺を見る際はかなり首の角度が鋭角なのに気付いていた。

肩幅、腕周り、首周り、ウエストと見て行くと、胸囲の部分が間違っているかとマリベルの聞いたら笑って否定された。

「バスト90！？嘘だろ！？見えないぞ！！」

「ちよつとおお！！どついう事よ！！」

「千歳、本当なのか！？」

「うん。着痩せするんだよね、祥子。」

のほんと笑った千歳をギリツと睨んだ祥子。俺は絶句し、そのまま思わず祥子の胸を見てしまい、それをマリベルに注意されるといふなんとも言えない光景が、祥子の家のリビングで繰り広げられた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2567p/>

カサブランカの記憶

2011年6月24日19時55分発行